

桜蔭俳話会 七月句会 (第三三七回)

素直すぎる母となりけり沙羅の花 友子

ときには口喧嘩したこともある母の介護に汗を流している作者。「素直すぎる」という形容には、母への万感の思いが痛切に受けとめられる。

八月やしつかり食べておけと母 才美

戦後の食うや食わずの混乱期を経た者として、終戦日(敗戦日)のある八月という時間設定は良く理解できる。評者の母も口癖のように言っていた。

サングラス売場の鏡独りじめ ツル子

添削: サングラス見立ての鏡独り占め

定位置のソファの軋み帰省の子 守

自句自解: 帰省した子の存在をソファの軋み音で表してみた。「定位置の」と言うことによって、以前の団樂の家族の位置関係を感じるであろうか。

味みして母の味なり盂蘭盆会 ツル子

添削: 今年また母の味なり盂蘭盆会

片蔭の途切れる毎の影ひとり 友子

片蔭と影を取合せた俳句はよくある。この句の良さは、片蔭が途切れる「毎」と言うことによって、片蔭の存在を如実に浮かび上がらせ、「影ひとり」と言うことによって、所詮人間は独りで生きて行かねばならない存在であると、断言したことである。

手を止めることなく返事杏煮る 友子

焦がしてならずと杏を煮る鍋に付きっ切りの作者。背中からの問い掛けに手を休めずに返事をしている。作者と家人との良き関係性が描写されている。

金魚玉いつか宇宙へ移住かな 明美

添削: 金魚玉宇宙移住の予約券

身の内の水を滾らす炎暑かな 明美

「身の内の水滾る」という把握が良い。まさにフライパンの上にいるような油照の炎暑である。

ドア開く熱風の中さあ行かん ヤエ子

添削: さあ行かん大熱風へドア開く

日盛に行く当てもなし己かな 眞壽

添削: 日盛の行く当てもなき己かな

初蟬や戦後七十の夏を告ぐ 直子

添削: 初蟬の告ぐる戦後七十年

偏差値を問はぬ太陽大向日葵 才美  
添削: 偏差値を問はぬ太陽立葵

古稀過ぎて職捜しする梅雨の星 眞壽  
添削: 古希過ぎの職捜しなり梅雨の星

非常線張らるる街の暑さかな 明美  
凶悪事件が発生し、街に非常線が張られた事態。緊張を強いられた状況下で感じる暑さはひとしおであるう。

梅雨明けて兄の尻もち治るかな 直子  
添削: 梅雨の明け兄の足腰治りしや

うな重の松竹梅や梅雨あけし ツル子  
添削: うな重の松竹梅の梅が好き

瑕疵のある法制ひとつジギタリス 明美  
添削: ジギタリス平和法制瑕疵いくつ

多数派の隙間に確と猫じゃらし 才美  
添削: 多数派の隙へ一本猫じゃらし

大樹に白く大きな茸生 直子  
添削: 大木の伏しをり白き梅雨菌

原発の閉店セール冷奴 才美  
添削: 原発の閉店仕舞ひ冷奴

身を反らし青葉のかたち空に見る ヤエ子  
添削: 豊かなる青葉のかたち身を反らす

雷が遠く聞こえる山の寺 眞壽  
添削: 雷を遠くに聞きし山の寺

目に沁みる汗大山に雲かかる 友子  
添削: 汗沁みる目に大山の雲崩る

七夕に派手な短冊巡り見る 眞壽  
添削: 七夕や短冊の数人の数

老鷲や犬を連れたる背美人 ヤエ子  
添削: ほととぎす犬を曳きたる背美人

青蜥蜴古代のままで走り去る ツル子  
添削: 青蜥蜴古代の影を曳きにけり

百足虫遣ふ足の多さに悲鳴のみ 直子  
添削: うすやみの女人高野の百足虫かな

暗闇で風に吹かれて夏の月 眞壽  
添削: 夏の月風に眞向かふ二人かな

落ちてなほ姿崩さぬ凌霄花 ヤエ子  
添削: 凌霄花生き方変へぬ人ひとり

ラベンダー五色に映える美瑛の丘 直子  
添削: ラベンダー美瑛の丘の夜明けかな

夢の母の歩きてをりぬ屋寝覚 友子  
添削: 夢に母歩みてをりぬ屋寝覚

紅の濃いマンゴー届く昼日中 ヤエ子  
添削: 宅急便マンゴーの香を開きけり  
(不在投句 古野明美、荒木ツル子)

<ファックスの受信漏れ投句の評者選>

九頭竜の中州の雑木時鳥 幸  
中州の雑木に着目したのが良い。九頭竜という  
場所の特定も句柄を大きくしている。

朝市の日焼の女箆を編む 幸  
日焼も厭わずに農作業に勤しんでいる女性が、  
朝市で箆を編んでいる。実在感のある句である。  
「女」は「をみな」と表記した方が良い。

羅の中に秘めたる小引出し 幸  
添削: 羅や思ひ秘めたる小物入れ

石垣に偲ぶ乱世や夏木立 幸  
添削: 石垣に遺る乱世や夏木立

(文責 代表 増田 守)